

STAY OR GO

2000. 4. 10 発行

SUMIKO

Ammonite chair

LIVE

3. 26 西荻窪 ターニング



ammonite chair

●オムニバスCD「DRUG&DROP」に
DOOR, ガラスの2曲収録。

●1stCD「open the gate」発売中

★LIVE★

オムニバスCD「DRUG&DROP」発売記念LIVE

4. 18 名古屋E. L. L

4. 26 下北沢 garage

(withやぶいぬ/ルーク/needic&spoon/ザ・ゲリラ)

5. 3 千葉LOOK

(photo: 1. 23横浜7thアベニュー)

スキップカウズのイマヤスに「本物」と言わせ、ファンのなかにバンドマンや、彼らのLIVEを観てバンドを始めた人が多い事でもわかるように、バンドとしての魅力や演奏力は元々十分に持ち合わせているバンドである。

アンモナイト・チェアーのLIVEを観た事のある人ならわかると思うが、重たいリズムに明瞭なギターが奏でるメロディー。かなり気味に歌うボーカルが作り出す世界は聴くものの心に静けさをもたらす。

アンモナイトチェアーの前身のバンド「エクス」の後期はいろいろな感情の世界があって、その世界を覗ける楽しさとバンド全体にみなぎる勢いがある楽しさを感じる事が多かった。

'99年の5月にバンドを一から真剣に取り組む決意を固めバンド名を改名してからは、エキスの後期に感じたいろいろな世界というよりは、一つの世界を極める方向に進んでいるようにみえた。

それは「ピックの持ち方から見直した」という演奏面にも感じたが、詩の世界にも感じた。

金子の詩は表面的な事の起りを表現するのではなく、その奥にあるものを表現している。それだけに、なるような歌いかたでありながら、分厚い演奏に埋もれがちな細い声は、アンモナイトチェアーの世界の無力さを感じさせ、それが聴くものにつらさを感じさせることもあった。それは、いいものを持っていながらうまく活かしきれないもどかしさでもあった。

だからアンモナイト・チェアーになってから、「いいLIVE」って思ったことは何回もあったけど、楽しいって感じたことはなかったように思う。

しかし今日のアンモナイト・チェアーは、とにかくLIVE自体が楽しかった。思わず大きな口を開けてズーッと歌っていた。このバンドを初めてホコ天で見たときの心が軽くなる楽しさがあった。ボーカルの声がよく伸びていて、ふとい一本の線となって聴くもの

に届いてきた。ボーカルがドラムに負けない力を持ったことで、今まで内にももっていた詩の世界が一つの強い意志となって聴くものの心に一気に届いた。そのことがバンド自身にも力を与えた。

今まで出口(突破口)が見つけれず、どこへ向かっていいのかもわからず、ただただ大きくなるしか術を持たなかった飽和状態のエネルギーが一つの出口に向かって飛び出したというよりも、一つの出口を見つけることを待たずして、それぞれがそれぞれの場所でものすごい勢いで爆発し突破口を見いだした。その4つのベクトルは、ものすごい勢いで、ものすごいスピードで、ものすごい濃度のまま最後まで聴くもの心に向かって放たれた。それは、今まで下から上へものを見て何かを感じながらも、決して上の世界へ届くことのなかった金子の世界が、何かをぶち破って上の世界に突き出て、そびえ立つ様なものだった。それが急に起こったので驚いた。

アンモナイト・チェアーの洗練された世界と音に、エキス時代のあの「すげー」としかいいようのないテンション、瞬発力が一気に加わったのである。それを武器に「これがアンモナイトチェアーだ」といわんばかりのものを次から次へと放ってくる。

バンドとしての確かな力を持ち、更に自分たちの世界が全面に出ている今日のステージは、イマヤスの言うようにまさに「本物」といえるものだった。

「本物」は、純度が高く一瞬にして聴くもの自身を原点に戻してくれる作用があった。いろんなことに葛藤したり、悩んだりの日常の中で、考えすぎて本当の自分の気持ちがわからなくなることがある。整理のつかない気持ちは山になっていくのに、それを片づける時間もなくて投げやりになったり。そんなどうにもならなかった思いを一掃させ、忘れかけていた原点を見つめ直すことで自分自身の可能性をまた感じさせてくれた。捕われすぎたがんにがらめになってしまっていた心を解放してくれる作用があった。

この純度の高いLIVE。ぜひ生でライブ感じてほしい。